



【写真中央 3 階建隣の建物が大槌町立図書館 2011.4.20 撮影】

169号に引き続き東日本大震災を特集しました。

前号では県立図書館の取り組みを紹介しましたが、今号では、「大震災から1年を迎えて～県内図書館の取り組み～」を県内の図書館6館から報告していただきました。

震災から1年、お寄せいただいた各図書館の報告からは、震災当日の緊迫した状況や避難所対応、その後の図書館の立て直し、被災図書館への移動図書館車による巡回支援、震災関連資料の情報提供等、今後の図書館活動、災害発生時の対応に関するヒントが読み取れます。またそこからは、図書館の本質的な使命もみえてきたような気がします。

甚大な被害をうけた沿岸市町村図書館等の一刻も早い開館を祈らずにはいられません。

海辺の図書館の使命

洋野町立種市図書館

3月11日午後2時46分。強い地震がありました。すぐに震源地、震度を確認しようとテレビにスイッチを入れました。その途端、ブラウン管がバチンと破裂し映像を見ることができなくなりました。そこで次に、館内放送をかけて利用者を広い所に避難させようと思いマイクをとったのですが、電気系統がやられて放送をかけることができません。地震が続く中、急いで館内を走り「地震があったのでとりあえず駐車場の真ん中に避難してください」と呼びかけるとともに、ほかの職員は火の始末、外への避難出口の確保をし、全員外に避難していただきました。そうしている間にすぐ近くにあるに役場の防災無線の警報サイレンが鳴りだしました。「津波がくるぞ!」そう思いました。

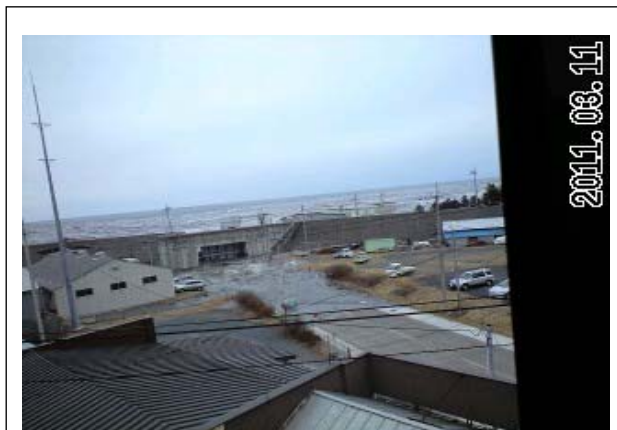
洋野町の旧種市町地区は以前にも大きな津波を経験し、その記憶はまだまだ新しいものとして個々人の中に生きています。私も小さいころから祖母に「どここの家ではおばあさんと孫が、畳に乗ったまま流されて～」というような話を聞いて育ちました。どの家でもたいていそういう話は聞いていたようです。そのため小学校、中学校、地域でも年に1度は津波の訓練を行っていました。近年は3月3日に実施するのが通例となっていましたので、ほかの地域よりも、津波に対する恐ろしさはちゃんと身につけていたと思います。それが今回の津波で、死者行方不明者が0という結果につながったのだと思っています。

サイレンが鳴ったことで、避難所である体育館には10分もしないうちに一人暮らしのお年寄りや、体の不自由な方々が担当のヘルパーに連れられて続々と避難してきました。しかし体育館は余震で天井の照明類があまりにも揺れ危険なため、急遽、図書館のつづきになっている武道館に変更になりました。私はストーブや灯油の手配、お茶セットの手配など避難所の準備を始めました。

ひと通り準備をしてから、図書館のレファレンスルームの窓から海の様子を見に行きました。



写真①：図書館から青い海が見える

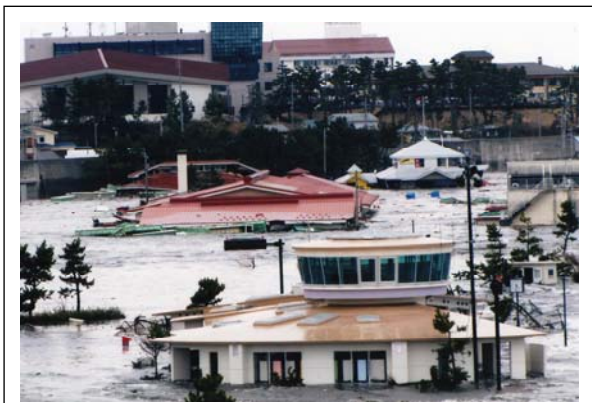


写真②：津波が押し寄せてきた

ふだんは写真①のような海が見えます。青い海があるはずのところ、見慣れない茶色い海に見えるのです。海の底が見えていたのです。驚いているうちに今度は海の向うから何か押し寄せてくるのです。それは堤防の向うで建物に当たり、それらを壊し、船や車を飲み込みながら渦を巻きはじめました。なにが起きているか信じられませんでした。そのうちに湾の中でぐるぐるまわっていたものがいっせいに沖の方に向かってひっぱられるように動き出し、それがまたこちらに向かっていっせいに押し寄せてきました。

写真②は図書館から100メートルもない所にある水門を1mくらい開けてしまい、海水が水門から流れ込んできました。もしかするとここも危ないと思い、避難所の皆さんのことを考えましたが、幸運にも図書館から目の前のちょっと下り坂になっている所で水の浸入は止まり、それ以上、海が襲ってくることはありませんでした。

写真③はその時の堤防の向う側の様子です。写真の左側に写っている建物の並びが図書館です。左端に水門が写っています。



写真③：堤防の向う側の様子

その日の夜は避難所の係として保健師さんと二人で、武道館に泊まってのストーブ番です。雪が降り余震もたくさんあったのでその度に消火をしたり、停電で懐中電灯が1個しかない中、トイレに立つお年寄りに付き添い、ラジオから流れる情報を聞き、もしもの時にはすぐに別の避難所へ移動できるようにと気を張って一晩を過ごしました。

洋野町は停電の復旧には2日から5日かかりました。その間、テレビからの情報も得ることができず、携帯電話も、電話も不通。電気が復旧しテレビなどからの情報を得るほどに、被害の大きさにただただショックを受けていました。

震災後、町の対策として停電によりテレビなどから震源や津波の情報を得ることができなくなることを想定し、防災無線ですぐに震源地、震度、津波の情報とともに住民がどういった行動をとるべきかを放送するようになりました。

図書館では地震があったときは、各部屋（場所）ごとの人数把握をすることにしています。またいざという時のため、屋上までのカギは全部解除することにしました。またアナログ式の時計、ストーブ、拡声器、ラジオなど、電気がなくても使用できるものの常備もしましたし、水についても、ボイラーを動かすための高架水槽受水槽の水が利用できるのです。ほかの施設よりは条件は良いと思います。

今回の震災では書架の上部を地震対策として、つなげて止めておくようにしておりましたので書架が倒れたり、本が落ちたりすることはありませんでした。見た目より機能が大事。前酒井館長の自前処置

なのですが、今回そのことが大きな効果を見せ付けてくれました。

なによりも「人」が大事。「命」が大事です。いざとなったら、第一に「命」を守らなければなりません。ちょっとした好奇心、ちょっとした恐怖心が生きるための行動を誤らせます。

そういった命を守るためにも、今回や過去の津波の記憶をきちんと伝えることが大切で効果的なことなんだと思いました。

写真④は、現在、種市図書館で開催している「大津波展」の様子です。種市図書館のほか町民文化会館でも常時、津波の様子の写真展を実施しています。



写真④：大津波展

「大きな地震がきたら、津波が来るぞ！津波がきたら、とにかく山（高いところ）へ！」それが、たくさんの犠牲を重ねた過去の人たちから伝わってきている生きるための教えです。その教えがあったからこそ、洋野町では今回、死亡者0、行方不明者0という「命」を守ることができたのだと思います。

今回の津波について、私たちが過去の人たちの言い伝えによって助けられたように、図書館は津波資料を集め、現在を生きるすべての人にも、そして未来の人にも、包み隠さず明らかにして、伝え続けていくことが海の近くの図書館で働く私たちの使命と思っております。

山田町立図書館への支援

北上市立中央図書館

決して忘れることのできない3月11日午後2時46分。あの日……

図書館はいつものように利用する市民で賑わっていました。

突然の地震発生！

大きな揺れ・きしむ音・落下物・悲鳴・一瞬にして図書館は騒然となりました。

利用者への緊急対応が終わっても、まだ余震は続いています。利用者を気遣いながらも、この地震は尋常でない。そんな不安が徐々に確信へと変わっていきました。

停電により情報が入らず、震度や被害の大きさがまったくわかりません。

今思うと情報のあふれた時代に生きている私たちが初めて経験する恐怖の事態でありました。



3月11日震災後の様子

閲覧室は天井が一部落下し、散乱した図書には冷暖房機の配管の損傷による水が降りかかり浸水状態です。惨状そのものでした。

「本を救う」作業がこの後しばらく続きました。内陸にある当中央図書館ですが、被害により2ヶ月間の休館をすることになりました。長期の休館は嘗てなかったことです。

開館後、被災図書館支援として当館は山田町立図書館を支援することになりました。

9月24日から12月10日までの4ヶ月間移動図書館車「ともしび号」での巡回が始まりました。山田町への3時間の道のりの途中目にする瓦礫の山

や打ち上げられた船、破壊された建造物は、報道等で見聞きしていた以上に実際に目にするると大きな衝撃でした。



山田町での移動図書館車の様子

山田町では4ヶ所の仮設住宅で貸出を行ないましたが、当初は利用者が来てくれるだろうかと心配でしたが、沢山の本を借りて帰る姿や楽しそうにやって来る子ども達を見て心配は杞憂に終わりました。

4ヶ月間で107人の方の利用があり411冊の図書が貸し出されました。

決して多人数の利用ではありませんが、熱心に本を選ぶ人たちが多く、読書を必要としている人達がいることを実感しました。

車内で久しぶりに再会した人達や、少し離れた場所からも歩いてくる高齢の方、図書館車を珍しがって元気よくはしゃいでいる子ども達が私達を励ましてくれました。

巡回中に見た風景は震災直後の黒やグレーだけの景色とは違い、あちこちに生えている草花の緑がまだまだ負けないぞ！と主張しているようで印象的でした。

短期間の移動図書館車の巡回でしたが、いくらかでも被災地の皆さんの安らぎと、心の豊かさを取り戻すことに、役立てたのではないかと思います。

これで終わることなく、当館がどんな形で支援ができるのかを考えて行きたいと思います。

震災以降の図書館の取り組み

遠野市立図書館

遠野市立図書館では、震災の影響で3月11日から3月31日まで休館し、4月1日から通常開館しました。当館に隣接している遠野市民センターは、当時一時避難所となり、沿岸被災地から約30人避難していました。そこで、当館ではその方々を対象に本の個人貸出をすることとし、一時避難所が閉鎖になる4月15日までの間15人が登録し約160冊を貸し出しました。



仮設住宅での本の貸出

その後、沿岸被災地（陸前高田市、大船渡市、釜石市、大槌町）の皆さんが当館を訪れるようになり、これまでで約400冊の本を貸し出ししています。

また遠野市には、被災者用の方々が入居している仮設住宅（40世帯）と雇用促進住宅（約55世帯）があり、図書館では昨年9月から移動図書館のルートに加え月1回の巡回貸出を実施しています。1月末日現在の延べ利用人数が38人、貸出冊数は延べ



雇用促進住宅での本の貸出

102冊となっています。仮設住宅の立地が図書館まで徒歩10分くらいの所にあることから、移動図書館利用から本館での利用に移る人もみられます。雇用促進住宅は郊外にあるため、今後も移動図書館による貸出の充実を図っていきます。

遠野市立図書館の今後の取り組みとしては、図書館業務を開始した図書館とは、これまで以上に相互貸借など連携を図り、いまだ図書館が再開できていない地域に対しては、今後も個人貸出を継続していきたいと思います。

■遠野文化研究センターの取組について

平成23年4月に設置された遠野文化研究センターと連携して献本活動を行っています。この活動は沿岸地域の文化を支援する「三陸文化復興プロジェクト」の一つです。現在までに全国から約26万冊の本が寄せられ、それらを整理・分類し、被災地の需要に応じて送り届ける活動をおこなっています。これまで献本の仕分け作業に参加したボランティアは、地元小中学生や首都圏の大学生など県内外から2,000人を超えています。



献本ボランティア活動の様子

献本活動は、被災地のニーズの把握と送り届けるタイミングが大切です。献本者の善意が無駄にならないように、届け先の迷惑にならないように、現地の状況を十分に把握し、〈いつ〉〈どのような本を〉〈何冊必要か〉を確定します。スタッフが図書館や学校を訪問し、担当者と連絡を取り合いながら、ニーズ把握につとめています。

今後も関係者と連携を図りながら、被災地に笑顔がもどる日まで、積極的な支援活動を行っていききたいと思います。

東日本大震災からの取り組み

奥州市立胆沢図書館

大震災から一年——。かつて経験のない様々なことに翻弄され、奔走する長い1年でした。胆沢図書館の取り組みを紹介します。大きく分けて2つあります。1つ目は「短期集中型の取り組み」。2つ目は「今後も継続して取り組む長期的取り組み」です。

■短期集中型の取り組み

「図書の修復」、「書架の見直し」、「情報収集及び情報提供」、「被災地への支援」があげられます。当館は、3月11日の本震よりも4月7日深夜に発生した余震の影響により、天井に配管してある冷暖房用水パイプ破損で、書架に大量の水が降り注ぎ、図書資料約2,000冊が水を被りました。



3月11日の震災後の様子

床も水浸しでカウンター内PC機器の撤去を余儀なくされました。水に濡れた部分は書架全体をブルーシートで覆い、その後、濡れた状態に応じて「重度」「中度」「軽度」に分け、「重度」は一ページごとに吸湿紙を挟み、アイロンをかけたものもありました。そして、湿気がなくなった図書はプレス機を使い修復しました。「中度」「軽度」は、天日干しをして乾燥させました。濡れた書架については、約二ヶ月間「立入禁止区域」とし、換気扇や扇風機を使用してとにかく乾燥を心掛けました。

また、同じ被害を繰り返さないよう被害のあった書架は冷暖房用水パイプを避けて配架変更しました。

利用者へは震災に関する市の情報を毎日館内に掲示することで、最新の情報を提供するよう努めました。沿岸市町村への支援として「子供向け絵本」を、奥州市立図書館として229冊集めて3月末に送りました。その後も、沿岸地域郷土資料を陸前高田市へ4冊、野田村へ2冊寄

贈支援しました。



4月7日深夜発生した余震の影響で水浸しの「中度」「軽度」資料を、同施設大ホールホワイエにて天日干ししている様子

■今後も継続して取り組む（長期的取り組み）

照明の削減、視聴覚ブースの停止、利用者用検索機の一部停止をして節電を強化しています。また、図書館は情報発信の拠点であることから、震災後「地震関連本コーナー」を常時設置して展示貸出しています。成果は目には見えない小さなことかも知れませんが、出来ることから始め、積み重ねることによって、やがて大きな力となると思います。震災後の課題としては、初期人命・資料救済のマニュアル化や最優先資料の選別をすることです。それが、貴重資料を収集保存する図書館本来の重要な使命でもあると考えます。



4月7日深夜発生した余震の影響で水浸しとなった「重度」資料吸湿紙が乾いているか確認作業の様子

震災を通して感じたことは、天災は予測できないため、日々あらゆる想定をすることが必要であるということです。この経験を決して忘れずに、記録として残し、対応策を練り上げることが大切であると思います。今回の震災で大きな被害のあった沿岸市町村図書館の皆様にお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復旧・復興をお祈りし、報告いたします。

大震災後の1年を振り返って

大船渡市立図書館

当市立図書館は、文化会館と複合施設となっておりますが、津波の被害はなく、3月11日から8月18日まで避難所となりました。

この間、避難者は200人～300人で推移しましたが、駐車場には避難者向けの自衛隊の風呂が設営されたり、心のケアのためのトレーラーハウスも設置されるなど、震災対応施設としての役割を果たしました。



駐車場の避難所向けのトレーラーハウス

図書館内の被害は、照明器具の脱落等があった程度で大きくなく、図書の落下も少なかったところですが、電話回線が長期間にわたって復旧せず、また図書館内の一部が避難者や応援自治体職員の居住スペース、避難所対応の物資置き場等に利用されていたこともあり、再開は6月4日となりました。



カウンター内の支援物資

図書館再開後は、震災当時の新聞を閲覧する方や震災関連図書コーナーの図書を閲覧される方々が多

く見られました。また震災の影響と思われるが、津波に関連した記録を記載している大船渡市史や三陸町史の閲覧者が多くなりました。

また、移動図書館車の巡回は、ルートの見直し等のため、7月から実施となりましたが、駐車場所も被災前の59箇所から38箇所に、大幅に減少することとなりました。

市内ボランティアによる子供たちへの月2回の読み聞かせ会も、10月からボランティアの皆さんのご協力で、再開をしております。

震災後、書棚の上段部分には、書籍の落下防止テープを貼りました。

複合施設全体として、予想よりは被害が小さかったこともあり、7月～8月にかけて、施設全体の修繕も終了し、10月1日からは、文化会館の一般貸出も開始し、現在は、文化会館、図書館の利用も順調に推移しております。

震災後は、避難所向けに、無償による図書の提供や、支援イベントの開催など、図書館関係機関はもとより、市内外の一般の方々からも、数多くのご支援をいただきました。現在の活動もこのような多くのご支援により、支えられております。誌上をお借りしまして、改めて、深く感謝申し上げたいと存じます



コンサートの開催

今後は、被災された近隣自治体の市民の皆様のご利用にも供しながら、微力ながら、震災復興の一助となれるよう努めてまいりたいと考えております。

震災からこの1年の取り組み

— 関市立 関図書館

■利用者の安全確保

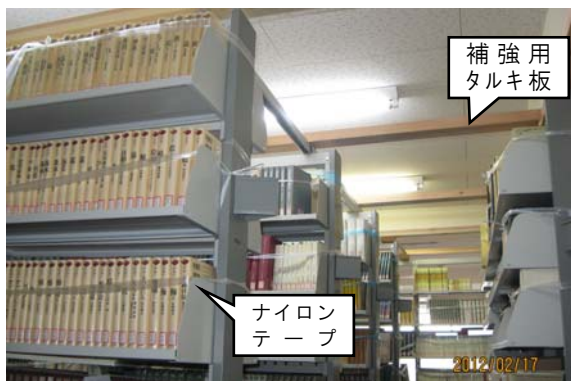
3月11日以降早急に取り組んだのが、本の落下防止と書架の転倒防止策。書架（6段180㌢）は上方に添え木を渡し転倒防止を強化、壁際の書架はアンカーで壁に固定した。



H23.3.11

震災直後の資料閲覧室の様子。奥の書架（H180㌢）が倒れ資料が散乱。利用者はなくけが人もなかった

閉架書庫にあっては書架上方添木の強化と併せ書架にナイロンテープを回し、落下防止に努めた。このため4月7日地震の際には資料の落下が3分の1ほどで済んでいる。後日、図書館振興財団から書籍落下防止シートの寄贈があり施工した。幸い大地震での効果検証は行っていない。



3.11以降の資料室の様子

書架（H180cm）の上方に板を設置、補強を図り、併せて、ナイロンテープを回し落下防止とした。4月7日の余震にはその効果が実証された

この体験から新一関図書館建設（平成26年度開館予定）に当たっては、構造を変更して層間変形角（地震の際の揺れの幅）を従来の倍の200分の1とした。

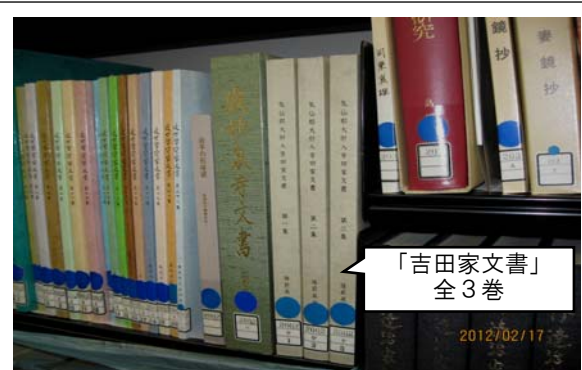
■郷土資料(住宅地図等)の充実

各地で「液状化現象」により建物等に深刻な被害が出たことにより、自分の住宅が昔どのような所に立っていたのかの問い合わせが多く寄せられた。また、沿岸地域から避難されている方からは被災前の自宅が判る地図の閲覧要望があった。このため住宅地図（岩手県・宮城県全域、福島県沿岸域）をいち早く取り寄せて閲覧に供するとともに、都市計画図などの地図の収集を図り問い合わせへの準備を行った。

■気仙郡大肝入吉田家文書

この度の津波では貴重な文化財が多く失われた。「吉田家文書」もその一つ。幸い図書館担当者が「文書」を一枚一枚丁寧に撮影していて、そのデジタルデータが奇跡的に見つかり、事業者の協力により写真として甦ったことは不幸中の幸いであった。

当館には陸前高田市教育委員会から寄贈された「気仙郡大肝入吉田家文書」全3巻を所蔵している。陸前高田市で新図書館を設置した際は所蔵しなければならない地域資料であるが、当館にとっても貴重な資料であることにかわりなく板挟みの心境である。



【気仙郡大肝入吉田家文書】

H15.3.20 陸前高田市教育委員会発行 全3巻

■課題、感想

今回の震災で強く感じたことは、地域資料をどのように保存し引継いで行くかである。地域振興、地域起こしが盛んに言われているが、その基になるのは地域の歴史である。先人が一つ一つ調べ、聴き、書き留めたものが地域資料であり、一度失われると容易には再現できない極めて繊細な資料と言える。これを組織的系統的に保存する体系が必要と感じた。その役割を県立図書館だけが担うのではなく、例えば、沿岸地域図書館と内陸地域図書館の相互関係を作り、お互いのバックヤードとしての機能を構築することはできないだろうか。そんなことを考えております。